
魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア

【Nコード】

N9733Z

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

これはとある世界の一人の青年が魔法少女まどか マギカの世界に行くお話です。

青年と少女の出会い（前書き）

作者「自分の考えたオリキャラ剣舞がまどかマギカの世界に行った
らと言つ話です。」

青年と少女の出会い

ここはとある世界…この世界に居る超天才科学者の所に一人の青年…剣舞が来ていた。

「チャタイン？何のようだよ？」

「実は君に調整が終わった次元転送装置の実験台になってほしいんだ。」

超天才科学者のチャタインはメガネをクイツと上げながらそう言うが。

「嫌だよ。」

剣舞にあっさり断られてしまった。
チャタインは剣舞に断る理由を聞く。

「何故嫌なんだい？」

「だってチャタインの装置の実験台って大抵ろくな目にあわないって聞くし。」

剣舞にそう言われるとチャタインはニタア…と笑いながら剣舞にこう言った。

「大丈夫、今回は発信器も着けるから。」

「んー……じゃ、いつか。」

発信器をつけると聞いて剣舞はあっさり実験台になる事を了承した。

「よしじゃあ発信器をつけるよ。」

「おう。」

チャタインに小型の発信器をつけられる剣舞。

発信器をつけ終わるとチャタインは剣舞に次元転送装置に乗るように言った。

「じゃ、早速乗ってよ。」

「分かったぜ。」

剣舞は次元転送装置の上にチャタインに言われた通り乗った。
すると…

バチッ、バチッ

「チャタイン…変な音が聞こえんだけど？」

「…ダメか。」

「何じゃそりゃあー!?!」

ブウウウン…。

「まっ、発信器があるから探せるし別にいいや。」

金髪の中学生…バマミは驚いていた。
…急に目の前に現れた剣舞に対して。

「あ、あの…貴方は一体…？」

グウウ

「腹減ったな…。」

「……………じゃあ家でご飯を食べますか？」

バマミは何故自分がこんな事を言ったかは分からないがとりあえず
目の前の青年…剣舞が本当に腹を空かせた顔をしていたからだろう。

「いやー、マジでありがたいぜ。飯を食わせてもらってよ。」

「いえ…私も誰かと一緒に食事が出来て楽しかったですから…。」

剣舞はそれを聞くとキョトンとした顔でマミに聞いた。

「何だお前、友だちいねえのか？」

剣舞のその言葉はマミの胸にグサツと刺さった。

確かに自分が誰かと一緒に食事を出来て楽しいとか言えばそう相手は考えるだろうが。

「じゃあ俺が友だちになってやるよ。」

「えっ!？」

彼は今なんて言った…自分と友だちになる…と言ったのかと巴マミは耳を疑う。

「いきなり会った人と友だちになるなんておかしいですよ？」

「じゃあ、お前がいきなり会った俺に飯を食わせたのもおかしいんじゃないかねか？」

マミの言葉に剣舞がそう言い返すとこの場の空気がシーン…となったあと剣舞とマミは笑いだした。

「あはははっ!どっちもどっちじゃねえかよ。」

「うふふふっ!そうですね…あと私はお前じゃなくて巴マミです。」

「じゃ、マミって呼ぶな。」

剣舞は軽くそう言った。すると巴マミは顔を赤くする。

「男の子が女の子を名前で呼び捨てにするのは友だちって言うより

も恋人だと思えますけど…?」

「うーん…でも俺は基本、人の事は名前呼びで呼び捨てだしな…。」
剣舞がそう唸りながら言うとマミはクスツと笑いながら剣舞にこう言った。

「別に名前呼びでいいですよ?…その変わり私も貴方の事を呼び捨てにしますよ。…えっと貴方の名前は?」

「俺は刀刃剣舞って言う名前だぜ。」

「変わった名前ですね。あつ、気にさわったらすみません…。」

マミは剣舞の名前が変わってるとつい言ってしまったが、その事を謝る。

だが剣舞は笑いながらこう言った。

「おう、変わった名前だろ。でも格好悪くはないだろ?」

「確かにそうですね…ふふっ。…所で剣舞が持つてるその刀は玩具ですか?」

剣舞はそう聞かれるとこう答えた。

「本物だけど?」

「銃刀法違反ですよ!?」

マミは剣舞に対してそう言った。確かに正論だ。

そして剣舞は俺の世界じゃねえから本物とか言ったらダメだったか
と思ったが既に遅い。

「あー…ちょっと警察とかに言うのは待ってくれ、事情を話すから
さ。」

「事情…？」

剣舞は自分の世界の事や自分が何故急にマミの目の前き現れたのか
を話した。

するとマミは少し疑いながら剣舞に聞く。

「本当ですか…？異世界から来たなんて…。」

「うん、マジだぜ。」

剣舞は迷いのない澄んだ目でマミの目を見つめながらそう言った。
剣舞に目を見つめられたのでマミは顔を赤くする。

「信じるわ、友だちだもの。」

「ホントか！？サンキューな、マミ。」

剣舞はマミの手を握りながらマミが自分を信じてくれた事を喜ぶ。

「剣舞、手…。」

「なんだよ？マミ。」

マミは剣舞に手を握られた事でドキドキするが、剣舞はそんなマミ

の気持ちなど知るよしもなかった。

「そつだ、マミさすがに家に泊まるのは悪いから俺、今夜野宿する場所探してくるわ。」

「親に許可をもらって来るからいいわよ剣舞。」

「ホントか！？…でもやっぱりなー…よし俺、やっぱり野宿にするわ。」

剣舞がそう言つとマミは暗い顔をした。

「友だちがここまで言ってるのに断るの…？」

「急にそんな暗い顔してどうしたんだよ？…って何で急に泣き出すんだ！？分かったよ、家に泊まるから泣き止んでくれ！？」

剣舞が必死にそう言つとマミはさっきまでの泣き顔が嘘であつたように笑顔になった。

「じゃあ、決まりね。剣舞は私の部屋で寝ていいわよ。」

「嘘泣だったのかよ！？。」

こうして剣舞はマミの家に泊まる事になった。

夜…マミの部屋で剣舞とマミは同じベットで寝ていた。

最初は剣舞は『床で寝るよ』と言っていたがマミが『床はダメよ固いから、ベットの方が柔らかくて気持ちいいでしょ?』と言ったからだ。

「人が側にいるのって落ち着くな…。」

マミは剣舞が隣に寝ている事で安堵を得ていた。
一方剣舞は。

「スー……スー…。」

気持ち良さそうにグッスリと寝ていた、マミはそれを見て少し不機嫌になる。

「こんなかわいい女の子が隣に居て剣舞は何で緊張しないんだろ…
もつとくつついちゃえ!」

マミは自分の体を剣舞に密着させる。
そうすれば剣舞は少しは自分を意識するのでは?と思ったからだ。
マミが体を密着させると剣舞はマミを抱きしめてきた。

「えっ…!?」

「兄ちゃんの布団にまた入ってきたのか…仕方ないなあ…一緒に寝てやるぞ……スー…。」

どうやら夢を見てマミを抱きしめたようだ。
剣舞に抱きしめられたマミは顔を真っ赤にして気絶してしまった。

しかし…剣舞はそんなマミの様子を知るよしもないのですた。

青年と少女の出会い（後書き）

作者「この話しについて感想くるかな？」

キレル剣舞（前書き）

作者「青年と少女の出会いの続きです！」

キレル剣舞

次元転送装置による事故で別世界に飛ばされた青年、剣舞は偶然出会った巴マミの家で世話になっていた。

そして現在、彼は何かを作っていた。

「うーんと…よし出来た！」

剣舞は自分の作っている物が完成すると、学校に行こうとし玄関にいるマミの元に向かう。

「マミ、これやるよ。」

剣舞はマミに丸くてかわいい見た目の動物の木彫りの人形を渡した。

「これは…？」

「世話になってるからなプレゼントだ。それともやっぱり木彫りの人形なんかじゃ嬉しくねえかな？」

剣舞がそう言うとマミは剣舞から渡された人形をギュッと握りしめ首を横に振る。

「うっん…とっても嬉しいよ、ありがとう剣舞。」

「そっか、よかったぜ！学校に気をつけて行けよ、マミ。」

「うん、行ってくるね、剣舞。」

マミは剣舞に見送られ学校に向かうのだった。

マミが学校に行くのを見たあと剣舞はある事を考えていた。

「マミ、両親に俺が泊まる許可を取るって言ってたけどこの家にはいないよな…両親は別の所に住んでて電話で許可取ったんかなあ？まっ、いつか。」

マミにはマミの事情があると思い、深くは詮索しない剣舞であった。

場所は変わってマミの通う学校。

マミは休み時間に剣舞から貰った人形を見つめ笑顔になっていた。

人形を貰った事が嬉しかったのだろう…厳密に言えば誰かからプレゼントを貰った事がマミは嬉しいのだが。

「何ニヤニヤしてんのよ？」

マミが人形を見つめているとクラスの女子の一人がマミに話しかけてきた。

「えっ、いや別に…。」

「何その人形？ちょっと貸しなさいよ。」

クラス的女子はマミからそう言って人形を奪い取った。

「あっ！？返して！」

「こんな人形の何処がいいのかしら…こうしちゃえ！」

人形を奪い取ったクラス的女子は人形を床に落とすと人形を踏みつけた。

「止めてよ！？その人形は大切な物なの！」

「大切な物ねえ…そう聞くと壊したくなったわ！」

クラス的女子はそう言っくと人形を連続で踏みつけ壊した。

マミはそれを見て絶望にまみれた表情をしたあと急に怒りが込み上げ人形を壊した女子を突き飛ばす。

「痛っ…何すんのよ！もう怒ったわ…あんたちよっとなついてきなさい。」

「えっ…！？」

マミは人形を壊した女子にある場所に無理矢理連れて行かれる。

女子が集めた複数の男子とともに…。

人が寄り付かない教室…マミは人形を壊した女子が集めた複数の男子に囲まれていた。

「本当にこいつ犯っちゃっていいのかよ？」

「ええ、構わないわ。」

「いい体してんなあ…たまんねえぜ！」

男子の一人がそう言うのとマミは体をビクツと震わせる。

自分がこれから何をされるのか恐怖しているのだ。

「天涯孤独の奴がどうなろうと誰も悲しまないわ、さあ犯ってしまいなさい。」

人形を壊した女子がそう言うのと男子の一人はマミを押し倒し覆い被さる。

「へっへっへ…まずは俺からだ！」

（助けて…剣舞くん。）

届くはずがない…そう思っていたががマミは剣舞に助けを求めた。
しかし届くはずがないと思っていたマミの思いとは裏腹に…

「お前らマミに何してんの？あとマミ、お前俺に助けを求めたか？」
マミの思いは届き剣舞はマミを助けにきた。

人形を壊した女子とその女子に集められた男子達は剣舞が急に現れた事に驚いていた。

「何処から来たのよあんた！？」

「瞬間移動でここに来たけど？それよりも…。」

剣舞はマミの上に覆い被さっている男子に近づき。

「マミ、嫌がつてんじゃねえか…離れる。」

剣舞は急に柔らかい雰囲気から鋭くピリピリした雰囲気になりマミに覆い被さっている男子にそう言った。

だが男子はヘラヘラしながら剣舞に言葉を返した。

「離れろって言われて離れると思つてのかよ？」

男子がそう言うのと剣舞は鋭い目付きになりこう言った。

「もう一度だけ言う…離れる。」

「嫌だ…ねっ！？」

嫌だと言った瞬間、男子の顔面に剣舞の拳がめり込んでいた。

そして男子はそのままふき飛ぶ。

「な、何なのよあんた!？」

女子にそう言われると剣舞は、ハッキリとこう答えた。

「マミの友だちだ!」

「天涯孤独のこいつに友だちがいたの!？」

剣舞は天涯孤独と言う言葉を聞くとピクツと反応する。

「天涯孤独…?」

「こいつは事故で両親を無くしてんのよ!しかも自分だけ生き残ってんのよ、笑えるわ!」

剣舞は女子の言葉に怒りを覚えつつもマミの方を振り向いた。

「マミ…じゃあ、あの時の両親に許可を取るってのは?」

「ごめんなさい…剣舞に余計な気を使わせたくなくて…。」

マミが申し訳なさそうにそう言うと剣舞はマミの頭の上に手をポンツと乗せる。

「謝んなくていい…だって俺に気を使わせたくなくて嘘をついたんだろ?…俺の方こそマミに気を使わせてごめんな。」

剣舞はそう言ってマミの頭をわしやわしやと撫でた。

マミは頭を撫でられて思わず赤面していた。

「で？お前らはマミに何をしようとしていた…。」

剣舞は威圧を漂わせながら女子と男子達にそう言った。

すると女子は剣舞の威圧に若干怯えながらもこう言った。

「そいつが人形を見てニヤニヤしてム力ついたから男子達を使ってメチャクチャにしてやろうと思ったのよ…！」

女子のその言葉を聞くと剣舞の立っている地面にヒビが入り、破片が宙にと浮かぶ。

「ただ…それだけで…？それだけの理由でマミを苛めたのかあ…！」

剣舞がそう怒鳴ると部屋中に細かなヒビが入る。

女子と男子達は何が起こった？と辺りを見回していた。

「何かよく分からないけど、あんたもム力つくわ！あんた達まずは、あいつをどうにかしなさい！」

女子がそう言っていると男子達は剣舞を囲む。

「この人数に勝てると思ってんの？どうやってここに来たか、分からねえけどその方法を瞬間移動とかイタイ事を言ってる兄ちゃんよ。」

「俺らより年上っぱいのマジ、中二病じゃね？」

「俺はボクシングやってるんだぜえ？」

男子達は色々剣舞に向かって言うが剣舞は男子達の言葉に耳を貸さず、主犯格の女子を睨みつける。

「無視してんじゃねえ！」

男子の一人がそう言って剣舞に殴りかかるが剣舞はそれを軽くかわし顎に掌底を食らわせた、男子はグラツと揺れると気絶する。

「お、俺はボクシングを…」

男子の一人が何か言いおえる前に剣舞は見事なストレートをその男子に叩き込む。

「ボクシングをやってるわりにゃ構えがなってないな。」

「何だよこいつ…うわああ!!」

男子の一人はナイフを取りだし剣舞に突き刺そうとした、…だが。

「切れ味の良くない、ナイフだな。」

「えっ…!!?」

ナイフは剣舞に突き刺さらずに折れてしまっていた。

男子はそれを見ると怯えた表情をして部屋から逃げ出そうとする。

しかし剣舞はそれを見ると手を男子の向かう方向のやや先に向け。

「はあっ！」

軽く気を放ち牽制した。

男子は自分の目の前の地面がヒビだらけになった事に怯え地面に尻餅をつき、シヨンベンを漏らす。

「他の奴らもかかってくんのか？」

剣舞が残った、男子達にそう言うと男子達は下を向き、ただ震えていた。

それを見ると主犯格の女子に剣舞は近づいていく。

「ご、ごめんなさい！もうしませんから！」

女子は剣舞に向かって謝るが剣舞は怒りの表情を変えずに女子に近づく。

「謝るのは俺にじゃねえ…ママにだろうが！」

剣舞はそう言うと拳を振り上げる、そしてその拳を…主犯格の女子にではなく女子のすぐ後ろの壁に叩きつけた。
すると壁は粉々に消し飛ぶ。

それを見た女子は、歯をガチガチとさせながら怯え地面に腰を落とした。

「お前なんか殴る価値もねえよ…。マミ、帰んぞ。」

剣舞はそう言うとき手を引き起き上がらせようとするが、マミは恐怖で腰が抜けている為、立ち上がれない。

剣舞はそれに気づくとマミをお姫様抱っこと言う形で抱き抱えた。

「えっ！？ちよっ…剣舞…」

マミが何かを言おうとする前に剣舞は額に指をあて、瞬間移動をする。

瞬間移動した剣舞はマミの住んでいる場所の近くに移動していた。

「悪いな、マミ。俺の瞬間移動は誰かの気を感じて移動するから家の近くまでしか来れねえんだ。」

「剣舞：貴方って凄いわね。」

瞬間移動をした剣舞に対してマミは思わずそう言ったが、当の剣舞はキョトンとしていた。

「へっ？何が？」

「…それよりも私、まだ学校終わってなかったんだけど…」

マミがそう言っていると剣舞は焦った顔をして慌てた。

「えっ！？わ、悪い…マミ。」

剣舞が謝るとマミはクスツと笑った。

「もういいよ、今日は学校サボるから。」

「俺も学校、時々サボってたな。」

マミがサボると言っていると剣舞は自分も学校を時々サボってた事を思い返してた。

マミはそんな剣舞を見てこう言った。

「私はそんなにサボってないですよ？」

「確かにマミはあんまサボりそうにねえな、ははっ！」

剣舞はマミにそう言われると笑いながら言葉を返した。

このあと二人は喋りながら家へと帰路を歩む…そしてマミの中に剣舞に対する特別な感情が芽生えていたのだった…。

キャラ紹介（前書き）

作者「キャラ紹介です。????は終盤に出るかもしれません。」

キャラ紹介

刀刃剣舞

異世界から魔法少女まどか マギカの世界からやって来た青年。

彼の世界は色々な世界と繋がって成り立っている。

彼の見た目は茶髪の少しツンとした髪に整った顔。

服装は、白のシャツに灰色の革ジャケットに黒い革のズボン。

身長は179cm

戦闘能力は非常に高く、技や特殊能力も持っている。

性格はフレンドリーで明るい親しみやすい性格。

ただし誰かの為にキレると言葉が少し鋭くなる。

???

終盤で出るかも？たこ焼き屋を営んでおり、彼の作るたこ焼きは絶品。

変身型の宇宙人である。

見た目はハゲ頭のいかついオッサン。

因みに母親はでべそ。

キャラ紹介（後書き）

作者「????の特徴はある人と似てるかも...」
「

万引きはいけねえぜ？（前書き）

作者「文章力もつと上げなきゃな…。」

万引きはいけねえぜ？

剣舞は現在、散歩をしていた。

特に理由も無く、ただ気まぐれに歩いているだけである。

因みにマミには散歩してくると剣舞はちゃんと言っている。

「たまには散歩もいいよな。んっ？」

剣舞は散歩をしている途中で八百屋の前でキョロキョロしている赤髪
の長髪の少女を見つけた。

明らかに様子が変だと剣舞は分かった。

少女は店員の注意がそれると店のリングを素早い動作で取った。
要するに万引きだ。

少女はそそくさとその場を離れようとするが。

「待てよ。」

「!?!?。」

剣舞は少女を呼び止める。

すると少女は動揺した表情を見せた。

「万引きはいけねえぜ？そのリングは八百屋のおっちゃんに謝って
返さないとな。俺も一緒に謝るからさ。」

「お前、何言つてんだ!？」

少女は剣舞と一緒に謝ると言った事に驚いた。

何故なら剣舞は少女にとっては赤の他人だからだ。

「ほら、行くぞ。」

「ちよっ!？」

剣舞は少女の手を引いて八百屋の店員の所に向かう。

そして剣舞は店員に向かって勢いよく頭を下げ謝った。

「済みませんでした!」

「なっ、何だい急に?」

店員は急に剣舞が謝って来たので何かなんだか分からないようだった。

「この子が店のリンゴを取ってしまったんですけど、腹が減りすぎたからついやってしまったと思うんです。だからどうかこの子を許してください!」

剣舞がそう必死に謝ると店員は店長に声をかけた。

「店長、この青年が何かこの女の子がうちのリンゴをとってしまった事について謝ってきたんですけど…」

「リンゴをもうひとつその兄ちゃんに渡して店の前から消えるように言え。」

店長は渋い声でそう言った。

店の前から消えるように…つまり許してくれたと言う事だろう。

「よかったな!許してもらって!」

「いや、お前しか謝ってねえじゃんか…」

確かに許してもらっただろうが謝ったのは万引きをした少女では無く、剣舞だけだった。

しかし剣舞は…

「まあ、許してもらったから別にそんな事はどうでもいいじゃないか？それよりも万引き何てもうするんじゃないぞ。」

剣舞はそう言うのと少女の頭の上に手を乗せて、わしゃわしゃと撫でた。

「！？…気安く撫でんじゃねえよ！」

「悪いな、ついクセだよ。嫌だったか？」

「べ、別に嫌とかじゃ…」

少女は正直頭を撫でられたのは嫌じゃなかった。
剣舞に撫でられるのは何故か落ち着いたからだ。

「おい、店員。さつさとそのいちやついてる二人をリンゴを渡して店の前から消えさせる。早くしねえとクビにするぞ。」

「は、はいいい！！君達、ほらリンゴだよ。早く店の前から離れてね。僕がクビになるから。」

「あつ、はい。じゃ、行くか。」

「行くって何処にだよ？」

剣舞が何処に行くかを少女は何となく聞くと、剣舞は笑って答えた。

「とりあえず、山かな。」

「はあ…？」

ここは自然豊かな山…そこに剣舞と少女が来ていた。

「何でついてきてんのお前？」

「アタシの勝手だろ…あとアタシはお前じゃなくて佐倉杏子だ。」

「じゃ、杏子だな。俺は刀刃剣舞。剣舞って呼び捨てでいいぜ。」

「…じゃ、剣舞。ひとつ聞くけど何で山に来たんだ？」

「キノコが食いたかったから。」

「はっ？」

剣舞の言葉に杏子は思わず啞然となる。

確かにキノコ食いたいから何て理由で山に来るやつはそうそういないから仕方無いだろう。

「じゃ、早速キノコ狩りと行きますか。」

剣舞はそう言うのと杏子もビックリのスピードで山奥へと走って行った。

「アイツ本当に人間か？…アタシが言えた義理じゃないか。」

杏子はボソリとそう呟いた。

剣舞がキノコを探しに行ってから五分後…

「杏子、沢山キノコが採れたぜ。一緒に食おう。」

腕に大量のキノコを抱えた剣舞が杏子の所に帰って来てそう言った。

「アンタ、短い時間でよくそんなに集めれたな!？」

「そっか?これでも時間がかかった方なだけだな?」

杏子は剣舞のその言葉を聞くと頬をピクピクさせながらコイツの時間の基準は何なんだよと考えた。

「さて、焼くか。」

剣舞はそう言うとうちに石で囲いを作り、その中に木の枝をくべ、指からピツと気功波を出し火をつけた。

「何だ、今のは!？」

杏子は剣舞が指から出したのが何かが気になったが剣舞が笑顔で一緒に食おうぜと言うので考えるのを止め。

地面に座り焼いたキノコを食べ始めた。

「俺の方に寄せてるキノコは杏子は食っちゃだめだぞ。」

剣舞がそう言うとき杏子は剣舞の方に寄せて焼いてるキノコをパクツと食べた。

「自分だけ特別美味しいキノコを食おうたって…そ…う…は?」

杏子は剣舞の方のキノコを食べたとたん痺^{しび}れて動けなくなってしまった。

「俺の方に寄せてたのは毒キノコだったのに…仕方ねえ、薬草を取って来るか。」

剣舞はそう言うのと薬草を取りに行った。

そして一分ぐらいすると薬草を持って戻って来た。

「いや、この山に良い薬草があつてよかったぜ。ほれ杏子この薬草を食え。」

剣舞はそう言うが杏子は体が痺れて口があまり開かなかった。

「仕方ねえな…医療行為だから我慢してくれよ。」

剣舞はそう言うのと薬草を自分の口に入れモゴモゴしたあと、杏子に口移しで薬草を飲ませた。

「!?!?。」

「これですぐに治るはずだ。」

剣舞がそう言った瞬間、蹴りが剣舞の顔面に飛んできた。

「ぶっ!?!?。」

「何、人の唇奪つてんだこの野郎!あ、アタシのファーストキスだったんだぞ!。」

「いや、あれは医療行為だつて…あつ、そついや俺もあれが最初のキスだな。」

杏子はそれを聞くとカァーっと顔を赤くする。

「…って事はアタシ達、互いにファーストキスを…」

「でもあれは医療行為だからノーカンだよな。ははっ。」

杏子はノーカンと言う言葉を聞くとピシッと頭にきた。

「アタシのキスはカウントする価値も無いってか？」

「いや、杏子が俺なんかとのキスでカウントするのは嫌だろうなって思っ
て思ってノーカンって言ったんだけど…何でそんなに怒ってんの？」

杏子はゆらりと近くにある木の枝を掴むと剣舞に向かって振り下ろした。

「わっ！？ちよっ、タンマ！俺のリンゴをあげるから落ち着いてくれ！」

「食いもんぐらいで今のアタシの気が落ち着くかぁ！！」

杏子は怒りながら剣舞に向かうが剣舞は走って逃げる。

「何でそんなに怒ってんだよ！？」

「うるせえ！アンタみたいな良い奴ならってちよっと思っただよ
！」

「何の事だよ！？」

「私の純情返せええ！！」

杏子は怒りをヒートアップさせる。

しかし剣舞は空に浮かび杏子から逃げる。

「えっ！？空に浮かんだ！？」

「またな！杏子。」

剣舞はそう言うところの場所を離れ何処かに飛んで行った。

「またな……か。」

杏子はそう言つと自分の唇を軽く触つた。
あの感触を思い返すように。

「また会つたら、責任とらせてやるぜ。剣舞。」

杏子は頬を赤くしながらそう呟いた。

ヒーロー見参！（前書き）

作者「原作とおりまぜるの難しいな…。」

ヒーロー見参！

気：それは生物の中に流れるエネルギー。

剣舞は今それを練り上げ 一点に：刀に集中する。

気を極限まで高めた瞬間：刀を鞘から天に向かい一気に引き抜き：居合いを行う。

そして最後に息をふう…とつき、刀を鞘に収めた。

「運動終わりだ！それにしてもこの世界はマトモに修行を出来る環境じゃねえな：まつ、遅れた分は後で取り返しゃいいや。」

この世界は自分の世界ほど修行に適した環境が無い為、剣舞は厳しい修行が出来なかったが、後で遅れた分は取り返せば良いと楽観的であった。

「それにしてもママは最近、妙に嬉しそうな顔をしてたな。良い事だよな。：でも魔法少女の仲間が出来るとかボソツと言ってたような：まつ、いつか。」

普通は気になる事をあつさりとまつ、いつかの一言で済ませる剣舞。魔法少女と言う言葉を聞いたら普通は魔法少女？と考えるのだろうが剣舞だから考えなくても仕方無い。

「でもこの世界、何か時々変な気配がするよな！。：本気で一回探ってみるかな。」

剣舞は全身の全神経を研ぎ澄まし集中する。

そして剣舞は変な気配の正確な場所とそこにいる誰かの気とそれに近づくマミと誰かの気を感じた。

「マミ！？…何か嫌な予感がするな。気配の場所に向かおう。」

剣舞は気配の場所へと空を飛んで向かって行く。

そしてすぐその場所へとついた。

「あそこ空間が変だ…んっ？」

剣舞は明らかに他とは違う空間を見つけると同時に捕縛術にかかっている、黒い長髪の少女を見つけた。

「お前、何で縛られてんだ？」

「貴方は誰…？」

「誰かって言うとな俺は刀刃剣舞だ。それよりも俺、あの変な空間の先に進むから。」

剣舞はそう言うとな刀で少女を捕縛していたものを切り裂き、先へと進んだ。

「えっ！？ちょっと待ちなさい！」

黒い長髪の少女は先に進む剣舞を呼び止めようとするが、その声は届かなかった。

変な空間…もとい結界の中でマミと魔女が交戦していた。

「お出ましのとこ悪いけど一気に片付けてやるわ!!」

マミは魔女に捕縛術をかけ銃を向ける。

そして勝利を確信した表情をする。

マミと共にいた少女二人もマミが勝利すると信じて疑わない表情をしていた。

だが魔女は動きを封じられていない口から鋭い牙を持つ不気味な自分の一部を出しマミへと向けた。

「え？」

予想になかった魔女の行動にマミはただ一言それしか言えなかった。もしかしたら自分の最後の言葉になるかもしれないのに…。

マミは死を覚悟した。

そして最後に思い出すのは剣舞の姿だった。

（彼に自分のしている事を言って協力してもらえば私、死ななかったのかな…？でも彼を巻き込む訳にはいかないよね…。好きって言うておけばよかった…。）

マミは不意に目を閉じる。

人は恐怖から逃れたい時には目を閉じてしまうものだ。

しかし幾ら目を閉じて待っても自分の意識が無くなる様子は無かつ

た。

マミはゆっくりと目を開けるそこには…

「よっ！マミ、危ない事してるなら俺に言えよな。俺はこういう事は慣れっこなんだぜ！」

片手でマミに向かって来ていた魔女の一部を抑え、マミに笑顔を向ける剣舞が居た。

マミは剣舞の姿を見ると目から涙をポロポロと流し始めた。
剣舞はそれを見るとオドオドする。

「えっ！？何で急に泣き出すんだ！？どっか悪いのか？」

「違うの…嬉しくて泣いちゃただけ。」

マミは嬉しかった、自分のピンチに剣舞がまた助けに来てくれた事が。

しかも今回もヒーローのようなタイミングで。

「じゃ、こいつをさっさと片付けっかな。」

剣舞は魔女を抑えていた手を魔女の一部から離し、その手で魔女の一部ををぶん殴り、ぶっ飛ばす。

本体も一部がぶっ飛ばされた勢いで一緒にぶっ飛んだ。

「それじゃお前を…斬るぜ。」

剣舞は居合い抜き of 体制に入り、魔女を見据える。

そして魔女に勢いを付けて向かい、剣舞は魔女を通りすぎた。

「……………」

魔女は何事も無いように剣舞の方を振り向き剣舞に食らい付こうとするが。

「もう…終わってるんだぜ。お前は。」

剣舞がそう言うのと魔女に無数の切れ目が入りバラバラになった。すると魔女が倒された事で結界は消え、さっきまで異様な雰囲気な場所は普通の場所に戻った。

刀を鞘に収め、剣舞は一息つく。

表情はさっきまでの真剣なものとは違い柔らかい表情をしていた。

「さあ、帰ろうぜ。マミ。」

剣舞は明るい無邪気の笑顔をしてマミにそう言った。

剣舞の笑顔を見るとマミやマミと一緒にいた二人の少女は頬を赤くする。

それほど彼がした笑顔は魅了的だったのだ。

「君は一体、何者だい？」

突然横から白い、見た目的には一応かわいいと言われる生き物が剣舞に話しかけてきた。

剣舞は話しかけてきた生き物の方を向く。

「うわー、変わった動物だな。」

「そんな事より僕は君が一体何者かと聞いているんだ。」

白い生き物は何処かム力つかく感じで剣舞にそう言った。

しかし剣舞は別にイラつかずに白い生き物に対して自分の事を答える。

「俺は刀刃剣舞。この世界とは別の世界からやって来た人間だぜ。」
「別の世界の人間だと…！？」

白い生き物はその事を聞くと驚く表情をした後、マミの方を向いた。

「マミ、君は彼と知り合いの用だけど僕には彼の事を一度も言わなかったね？」

「キュウベえに別に言う事ではないと思って…。」

「…まあ別にいいや。それにしても…。」

キュウベえは剣舞の方を向き、ある事を考える。

（彼は魔法少女でも無いのにあつさりと魔女を倒した…とりあえず注意はしておくか。）

キュウベえは自分の計画に影響を及ぼさないように剣舞に注意を払う事を決めていた。

そして剣舞はキュウベえがそんな事を考えている間にマミをお姫様抱っこして宙に浮いていた。

「えっ！？剣舞、貴方…」

「空飛んで帰る方が早えからな、悪いけど抱えて行くぞ。マミ。」

「剣舞って空飛べ…」

マミが何か言いおえる前に剣舞はマミを抱えて空に飛び立った。

「ははっ。マミ、どうだ？空から眺める風景は。」

空を飛んでマミの家に向かう剣舞はマミに空の上から見る風景について聞いた。

するとマミはこう答えた。

「うん、良い眺め…。」

「そりゃ、よかった！」

剣舞達は空を飛び、マミの家へと帰路についていた。

剣舞が空に飛び立つ所を影から見ていた黒い長髪の少女は剣舞について考えていた。

（……刀刃剣舞。異世界から来た人間か…奴のおかげで巴マミは死ななかったか……魔女をあつさりと倒すあの力はもしかしたら…。）

剣舞は己の知らないうちに様々な思惑に巻き込まれつつあるのだ…。た…。

ヒーロー見参！（後書き）

作者「指摘やアドバイスをよかつたらどう 부탁드립니다！」

モテるくせにモテないと言う男はムカつかれる（前書き）

作者「剣舞の鈍感さが表れます。」

モテるくせにモテないと言う男はムカつかれる

剣舞は現在、困惑していた。

その訳は…

「異世界から来た人って本当ですか!？」

「空を飛べたりしたけどヒーローか何ですか!？」

「異世界から来たのは本当で別に俺はヒーロー何かじゃねえよ。…
はあ質問されるのって疲れんな。」

マミが連れてきた二人の少女。鹿目まどかと美樹さやかに質問攻めにされていたからだ。

「…なあ、マミ。何で二人を連れてきたんだ？」

「剣舞の事が知りたいって二人が言ったからだけど？」

「俺の事なんか知って楽しいのか？」

剣舞は正直自分の事なんか知っても楽しくないと思っているが実際異世界から来た人などと聞けば知りたくなるものである。

「あとマミさんとはどんな関係で？」

さやかは剣舞の肩を肘で軽くつつきながらそう聞く。

剣舞はさやかの問いに普通に答えた。

「居候で友だちだ!」

「……何だ恋人であんな事やこんな事してる中じゃないのか…。」
「美樹さん!？」

さやかは剣舞の答えにガツカリし。マミはさやかの言った言葉に顔を赤くする。

「あの… 剣舞さんの世界ってどんな世界ですか？」

まどかがそう質問すると剣舞は少しだけ考えたあと答えた。

「凄え賑やかな世界かな？」

「できればもつと詳しく教えてほしいんですけど…。」

剣舞の余りにも短く単純すぎる答えに、まどかはもつと詳しく教えてほしいと剣舞に言った。

まどかにそう言われると剣舞は必死に自分の世界の特徴を分かりやすく頭の中でまとめあげようとする。

そして自分なりにまとめあげた事をまどかに答える。

「まず、宇宙人が凄えいるぜ。あとは強い奴が沢山だ。」

「宇宙人がいっぱいいるんですか！？ 凄いです！ あと強いってどのくらいですか？」

まどかは剣舞の世界に宇宙人が沢山いる事に驚いたあと、剣舞が言った強い奴の強さはどれくらいかを聞いた。

剣舞はそれを聞かれると説明しずらそうな表情をした。

「どのくらいって言われるとな… めちゃくちゃ強えかな。」

「めちゃくちゃって言われても分かりにくいんですけど…。」

まどかはめちゃくちゃではどれくらい強いか規模を理解できなかった。

確かに「めちゃくちゃ」と言う言葉では強さはイマイチ伝わりにく

いだろう。

剣舞は少し考えたあと、まどかに一応分かりすいと思った表現で強さの感覚を伝える。

「特殊な惑星以外の惑星は軽く消し飛ばせて、大体の次元の銀河も一瞬でチリにできるかな。」

まどかはそれを聞くと、驚愕した。

惑星とか銀河とか、もう完全に次元の違う話だったからだ。

「ええ！？じゃあ剣舞さんもそんな事が出来るんですか！？」

「やれば出来るけどやらねえよ。惑星とか銀河とか破壊しても意味ねえだろ。」

剣舞はまどかにそう言葉を返した。

確かに惑星や銀河を破壊するとかそれが目的でないなら意味は無い。

「剣舞ってそんなに凄かったんだ…。」

「マミさん。剣舞さんに魔女退治手伝ってもらったら楽になりますね！」

マミが剣舞の凄さに静かに驚いていると横からさやかがそう言ってきた。

確かに惑星と銀河がどうか言っているレベルの者に魔女退治を手伝ってもらえば楽だろう。

「でも、剣舞を巻き込むのはやっぱり気が引けるかなって…。」

マミがそう言うと剣舞は笑顔でマミに対してこう言った。

「気にすんなよーマミ。俺は、ああいうのマジで慣れてんだ。それにあの時はマミ、ヤバかったじゃねえか。だから俺に頼れよ。なっ！」

マミは剣舞にそう言われると笑顔になった。
自分が頼っていい人がいるんだと感じて。

「マミさん。顔が赤くなってる？あつ、もしかしてマミさん。剣舞さんの事が好きなの。」

さやかがそう言おうとするとマミは魔法少女の姿に変身し銃をさやかに向ける。

「美樹さん？そこから先はティロ・ファイナーレよ？」

「いや！？冗談ですよね！？」

さやかはそうマミに言うが、マミの目は笑ってなかった。

さやかは不味さを感じると日本人の代表的謝罪方法。DOGE
ZAの体制に入る。

「済みませんでしたあ！先は言いませんからどうかご勘弁を！」
「分かればいいのよ。」

マミはそう言うと言と変身を解き元の姿へと戻る。
マミが元の姿に戻るのを見て、さやかが本当に射たれるのでは！？と見ていたまどかはホッとしていた。

「マミは冗談がキツイよなー、ははっ！」

剣舞はマミのさっきの行動が冗談だと思っているが、さやかは…

（剣舞さん。さっきのマミさんの目は冗談言ってる人の目じゃなかったです…。）

マミの行動が冗談とは思っていなかったのであった。

とりあえず、まどかは気を取り直して剣舞に質問する。

「剣舞さんの世界の人で剣舞さんの知り合いってどんな人ですか？」
まどかにそう聞かれると剣舞は今までと違い答えやすそうな顔をした。

「そうだなー、サボテンステーキの店をやってる、緑色の声が妙に迫力があって、青色の沢山の子供がいる人や白い体に紫色の部分もある、ツルツルの人とか、たこ焼き屋をやってる、ハゲ頭のイカツイけど良いおっちゃんとか、他にもまだまだ居んなー。」

剣舞は楽しそうに自分の知り合いの事を語り出す。
まどかは剣舞の知り合いの話聞いていて…

（（（変わってる人達ばかりだなあ…でも一度見てみたいかも。）））

と思っていた。

剣舞が知り合いの事を一通り話すとまどかはある質問をする。

「剣舞さんって恋人いるんですか？」

まどかのした質問は女の子の好きそうな話題だった。
剣舞は恋人が居るかと思われるとあっさりと答える。
「居ねえけど？」

剣舞がそうあっさり答えるとマミはホツとし、まどかとさやかは意外そうな顔をした。

「剣舞さん、モテないんですか！？見た目はカッコイイし性格も良いのに！？」

「何言ってるんだよー、まどか。俺は別に見た目もそんなに良くねーし、性格もそんなに良い方じゃないと思うぜ？」

剣舞のその発言に少女三人は思った。

剣舞はモテてるのにそれに気付いて無いだけの人だと。

こんな鈍感な男を好きになった女の子は可哀想である。

と言うかこの場に一人居たが。

「まっ、俺は別にモテなくても良いから気にしてねーけどな！ははっ！」

剣舞のこの発言は剣舞を好きになった女の子からしてみれば、気にしろとグーでいきたい発言である。

「剣舞。一回殴って良い？」

「いきなり何だよ！？マミ！？」

マミがいきなりそんな事を言うものだから、剣舞はビックリする。でもマミの殴りたくなる気持ちは仕方ないだろう。

「俺、何か時々仲間達の大半からそんな事を言われるんだけど、理

由は一体何なんだ!？」

それはきつと仲間達がテメエは鈍すぎてイラつくんじゃない!と言
う気持ちになってるからだと思う。

「特に女子の目付きがその時、怖くなってんだよな…。」

そりゃそうだろう。女子は恋愛事に敏感だから仕方ない。

「マミさん。落ち着いて!」

「気持ちは何となく分かりますけど!」

「……………分かったわ。」

まどかとさやかに言われてマミは落ち着く。

しかし…

「俺は正直恋愛とかあんまり分からないから、一生しなくてもいい
や!ははっ!」

その言葉を言った瞬間トリプルパンチが飛んできた。

三人は声を揃えてこう言った。

「鈍すぎの上に恋愛しなくてもいいとか恋する乙女の望みを潰
すな——!!!」

「わ、わけがわかんねえぞ…?」

マミは冷めた目で剣舞を見るとこう言った。

「剣舞。今日は外で寝てね？」

「ええっ!？」

剣舞は何故そんな事を言われたかは分からないが、有無を言わずに家の外に追い出された。

「鈍感すぎるのって問題ですよ。あの人の事を好きになった人が可哀想です。」

「あれは私達もさすがにイラッとしましたよ。マミさん。」

「………… バカ剣舞。」

まどかとさやかは鈍感すぎ剣舞にイラッとし、マミはボソリと呟いた。

そして外に追い出された剣舞は…

「何で三人ともあんなに怒ってんのか分かんねえや？」

いまだに自分の事を理解せずにいた。

どうしようもない鈍感な剣舞であつた…。

この先、こいつに恋する乙女は報われるのかは分からない…。

モテるくせにモテないと言う男はム力つかれる（後書き）

作者「今日は鈍感な剣舞さんに質問です！貴方が近くによると顔を赤くする女性はいましたか？」

剣舞「そーいや、俺が近づくと急に風邪を引く女性って居んな。俺、何か悪い菌でも持ってたのか？」

作者「持つてるっちゃ持つてますね…。あと貴方が近づくと顔を赤くする人は風邪じゃないです。」

剣舞「じゃ、もっと悪い病気何か！？…俺、あんま女性に近づかないようにしねえと。」

作者「いや、命に別状は無い事なんで。」

剣舞「じゃ、何なんだ？」

作者「……………やっちゃってください。」

クンッ！

剣舞「うおっ！？急に地面から爆発が！？」

作者「避けたか…まっ、仕方ありませんね。」

剣舞「…てか、今の技はたこ焼き屋のおっちゃんのじゃ？」

作者「読者の皆様、次回もよろしくお願いします！」

剣舞「あれっ！？無視！？」

焰との対話（前書き）

「???」後書きは俺様が出るぜ！」

焰との対話

現在、剣舞はマミに家から追い出され、トボトボと歩いていた。

「マミは何であんなに怒ったんだろうな？さっぱり分かんねえや？」

自分の追い出された理由を考える剣舞だが、中々答えは見つからない様だった。

答えは非情にシンプルなのだが…。

剣舞が考えながら歩いていると何かを突然感じた。

「んっ？これはマミを助けた時に倒した、魔女って奴にちょっと似てる気配だ。あと、そのすぐ近くに複数の気を感じる。…行ってみるか。」

剣舞は感じた気配が気になったので気配を感じる場所へ向かった。

そして気配の発信源へとたどり着く剣舞。

剣舞のついたその場所は小さな町工場だった。

その町工場は閉まっているのに中から複数人々の気を感じたので剣舞は入り口を力づく開け、中に入る。

「こいつらの目…正気じゃねえぞ!？」

剣舞は人々の目が正気では無い事にすぐに気づいた。

そして人々の中の一人の女性が手に何かを持って、椅子に座ってる男性の前の洗剤の入っているバケツへと近づく。

「あれは塩素系の洗剤…って事はもしかして!？」

剣舞は女性の手に乗っている物で事を理解するとバケツを掴んで外へと放り投げた。

「危ねえ、あとちょっとでこの人たちがお陀仏だったぞ。」

剣舞がこれでひと安心と思っていると複数の人々が剣舞を睨みながら近づいて来た。

「魔女って奴を倒さねえとこいつらは元に戻らねえみたいだな。…済まねえ。」

剣舞は一言謝るとビリビリと威圧を出し人々を気絶させた。

「ちょっと手荒だけど、これで魔女を落ち着いて探せんな。」

剣舞がそう言った瞬間、空間の様子が変わった。
魔女の結界が張られた様だ。

「どっかに魔女が居んだな。さて、探すか!」

剣舞は魔女の気配がより色濃い場所へ向かい、魔女と対峙した。

「人形みたいな魔女だな。さて、すぐに終わらせっか!」

剣舞は刀を急に追い出されて持って居なかったので素手で魔女を打ちのめそうとする。

「戦哮獅子碎波!」

拳から出した獅子のオーラによる衝撃波で剣舞は魔女を軽く倒した。

「おっ？何だこれ？」

剣舞は魔女を倒すと出てきた物を拾う。

剣舞が拾った物は魔女の卵“グリーンフシード”だ。

当然、剣舞はこれの事をよく知らない。

「そっぴゃあ、あの時の奴もこんなの落としてた様な。まっ、深く考えなくてもいいか！」

剣舞は特に深く考える事もなく、とりあえずグリーンフシードは持つて置く事にした。

剣舞が魔女を倒し、工場から出るとあの時の黒い長髪の少女が居た。

「魔女の気配が消えたけど…貴方が魔女を倒したの？」

「うん、そうだけ。」

「そう…少し貴方に話があるのだけど。」

「話って？」

剣舞が何の話かを聞くと、黒い長髪の少女は語り始める。

「まず、私の名を言うておくわ。私の名は暁美焰。焰でいいわ。刃剣舞。」

「何で俺の名前を？」

「陰で聞いていたからよ。」

「ふーん、そっか。それよりも焰。俺は剣舞って呼び捨てでいいぜ

「！」
「では、剣舞。貴方にある事を話すわ。そう…ワルプルギスの夜について。」

焰は剣舞にワルプルギスの夜の事について全てを話す。

強力な魔女でこの街にしばらく日がたった後にやって来る事を。そしてその魔女がどれだけの被害をもたらすかも。

「だから、この街を守るために貴方の強力な力を貸してほしい。」
「嘘はいけねえぜ？」

焰は剣舞にそう言われた瞬間、表情を強ばらせる。

「私は嘘について。」
「ワルプルギスの夜つてのがこの街に来て大きな被害をもたらすつてのは俺は本当だと思ってる。」

「じゃあ、私がついた嘘と言うのは？」

焰がそう言つと剣舞は頭を軽く掻きながら答えた。

「焰…お前は街を守りたいんじゃないなくて、たった一人の大切な人を守りたいんじゃないか？」

焰は剣舞にそう言われるとドキツとした。正にその通りだから。

「大切な人を守りたいから力を貸してほしい。素直にそう言えばいいじゃないか。」

「……………貴方は街よりもたった一人を守りたいと思う私を軽蔑しないの？」

焰がそう聞くと剣舞はニツと笑い、焰に答えた。

「何で軽蔑しなきゃいけないんだよ？ いいじゃねえか、街よりも大切な一人を守りたいって思っても。」

「貴方、変わってるわね。普通は街を守る方が一人を守るより大切なんじゃない？」

「そうかあ？ 街なんて人を守るついでに守るもんじゃねえか？」

剣舞が陽気な感じにそう言うとな焰は思わずクスツと笑う。

「それじゃあ、貴方は人を守るためなら街はどうなってもいいの？」

焰は少し意地悪な感じに剣舞にそう聞いた。

だが剣舞は困惑する事もなく答えた。

「だって、街は作り直せばいいじゃねえか？ 大切なのは命だろ。」

「……確かにそうね。それで貴方は。」

「手伝うぜ。ワルプルギスの夜つてのを倒すのを。」

「そう……それは良かった。」

剣舞が協力してくれると言うとな焰はホツとした。

これであの子を守れると……。

「焰。それにしてもお前、凄えな。」

「えっ？ 何が？」

焰は急に自分が凄いと言われて混乱するが、剣舞はそんな焰に気づく事なく言葉を続ける。

「焰。お前はさ、色々なもんを一人で抱えてきたんだな……本当に凄

えよ。…よく頑張ったよな。けどもう一人で頑張らなくてもいいぜ？これからは俺も友だちとして一緒に抱えてるもんを持つてやるから。」

「！……。」

焰は剣舞にそう言われた瞬間、目から涙がポロポロと流れてきた。自分は確かに一人で色々なものを抱えて来た。

それに彼は気づき一緒に抱えてくれるとまで言ってくれたから。

「何で泣くんだ！？」

「貴方は不思議な人ね…本当に一緒に抱えてくれるの？」
「もちろん！」

剣舞が力強くそう言うのと焰は自然と柔らかい笑顔をしていた。長らくしていなかった笑顔を…。

「焰、お前…」

「何かしら？」

「凄え笑顔が似合うな！」

剣舞は思った事を言っただけだろうが、焰はその言葉に顔を赤くした。

「なっ！？」

「笑わない時でも、焰はかわいいけど、笑った時は笑わない時の数倍かわいいな！ははっ！」

「ナンパのつもり…？」

「ナンパ？何だそれ？俺ただ思った事を言っただけだぞ？」

「貴方、他の女子にもこんな感じなの？」

「思った事は普通に言ってるかな？時々相手が顔を真っ赤にして怒って殴ってくるけど。」

「それ怒ってるのかじゃないと思うわ…。」

この男はある意味やかいねと思う焰だが、剣舞はそんな気持ちを
知るよしもない。

「じゃあ、焰！またな！」

剣舞はそう言うところの場を空を飛んで離れていった。

「あっ！…行っちゃったわね。 剣舞…一緒に居て不思議と落ち着く人だったわ…。」

剣舞が飛んで行くのを見ると焰も帰路へとつくのだった。
剣舞に対する不思議な気持ちを抱きながら…。

焰との対話（後書き）

作者「????さん。剣舞はやっかいな菌をばらまきますね。」

????「まったくだぜ。てか俺はまだ名前伏せんのかよ?」

作者「まあ、辛抱してくださいよ。」

????「仕方ねえなあ。しかし、剣舞の奴は菌をばらまいてんの母親にバレたらボコられるな。」

作者「そうですね。あのママさんは怒るでしょうね。」

????「父親が丸くおさめるんだろうけどな。」

作者「ではそろそろ。」

????「読者の奴等!この小説と俺のたこ焼き屋をよろしく頼むぜ!」

作者「読者の皆様この小説をよろしく願います!」

人のために願う事は悪い事じゃない(前書き)

ナ???「魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア 始まるぜ
!てか俺様、名前が最初の部分だけ出てんな。」

人のために願う事は悪い事じゃない

焰と別れた後の剣舞は現在、寢床を探している時に教会を見つけていた。

「教会じゃねえか！こりや野宿じゃなくても済むかな？とりあえず中に入って神父さんに泊めてくれるか頼んでみよう。」

剣舞は教会の中に入った。しかし中には神父さんは居なかった。

「誰もいねえな。…勝手に寝たら怒られるかな？」

剣舞がそんな事を言っていると剣舞の後ろに誰かが来た。

「誰だ！テメエ！」

剣舞の後ろに居た人物は剣舞を怪しい奴だと思い怒鳴り付けた。剣舞は怒鳴られると後ろにバツと振り向いた。

「俺は怪しい者とかじゃなくて…って、杏子！？」

剣舞の後ろに居たのは人物は杏子だった。

杏子は剣舞が振り向いた瞬間、驚いた顔をした。

「剣舞！？何でアンタがここに！？」

「訳がありまして…。」

剣舞はこうなった経緯を杏子に話した。

杏子は剣舞の話を聞くと笑い出す。

「あははははは！そりゃ、アンタが悪いわ！！」
「そうなのか？」

剣舞は自分が悪いと言う事をまだ自覚できない鈍感だから。

「それにしても、剣舞がマミの知り合いで、マミの所に世話になつてるとはね。」

「マミの事を知ってんのか？杏子。」

「まあ、一応ね。それよりも剣舞、マミと一緒に住んでいて何かをやったりしたのかい？」

「何かって…何？」

剣舞がそう言うとき杏子はずっとこける。

「こういう時の何かって言ったら…あれだよ。」

「あれって？」

「あれはだな…女の子の口から言わせんな！」

杏子は剣舞を逆ギレしてぶん殴った。

まあ、剣舞にも悪い所はあるが…。

「ぶっ！？何でいきなり！？」

「そんな事より剣舞。アンタ、泊まる所がないならこの教会に泊まるといい。この前の借りもあるし。」

「本当か！サンキューな！杏子！」

「礼を言われるほどの事じゃねーよ…。」

杏子は剣舞に礼を言われると顔を少し赤くした。

「あれ？でもこの教会、杏子が泊まっていって言うなら、杏子の教会なんか？」

剣舞はちよつとした疑問を言うつと。

杏子は顔を暗くしながら答えた。

「アタシのつて言うより、アタシの親父のだよ……。」

「つらい事を思い出させちまったのか？悪い……。」

剣舞は杏子の顔を見るとつらい事を思い出させたとはい謝るが、笑つて剣舞にこう答えた。

「別に剣舞のせいじゃねーよ。どっちかと言うと私のせいだ……。」

「私のせい？」

杏子が私のせいと言うと剣舞はその事が気になった。

杏子は剣舞が相手だから話してしまうのか、語りだした。

「なあ、剣舞。今から話すのは一人のとある少女の話だ。……とある一人の少女は正直すぎて優しすぎる父親が大好きだった。その父親はどうして世の中が良くならないか真剣に悩んでる人だった。そしてその父親は世の中を良くするために人々にいっぱい自分なりに考えた事を話した。だけど誰も父親の事を分かってくれなかつんだ……だから少女はある願いを叶えてくれる人物に“みんなが父親の話を真面目に聞いてくれますように”って頼んだんだ。そしてみんな、父親の話を聞いてくれるようになった。そのあと少女は願いを叶えた代償に悪い奴らと戦う宿命を義務づけられた。少女は悪い奴らと戦う事自体は苦しくはなかった。だって裏から世界を救つてると思つてたから。でもね、ある時力ラクリがばれた。父親の話を聞いてくれるようになったのは魔法の力だつて事が父親に知られてしまつ

たんだ。父親は少女を魔女と罵った。そのあと父親は壊れてしまい、少女一人を残して一家心中した。どう思う剣舞…？」

「どう思っつて？」

「少女の事さ…少女が願わなければ父親は壊れなかった。家族は死ななかった。この少女の事をどう思う？」

杏子は悲しげな目をして剣舞にそう問いかけた。

すると剣舞は目を静かに閉じて少し考えた後、こう答えた。

「少女は悪くねえと思う。」

「どうしてだ？少女が願わなければ家族は死ななかったんだぞ！」

杏子が悲痛な顔をしてそう言つと剣舞は迷いなくこう答えた。

「少女は悪くねえよ。だって父親のために願っただけだろ。それで家族が死んじまったのは確かに悲しいよ…でもその少女が悪くない事だけは分かるぜ。」

「本当に悪くないと思うのか…？」

杏子は涙を流しながら剣舞にそう聞いた。

剣舞は杏子が泣き出した事に驚きながらも答える。

「ああ、本当に悪くないと思ってる。もしその少女を悪いとか言う奴が居たら俺がぶつとばす！」

剣舞がそう言つと杏子は思わず笑っていた…剣舞のお人好しの良さに。

「剣舞…アンタって本当に良い奴だな。」

「そうかあ？俺は思った通りの事を言つて、思った通りの行動をし

てるだけだぜ？」

そう…剣舞はただ自分に正直に生きているだけだ。ただそれが人にとっては良い人になっているだけなのだ。

「……………剣舞、実は今の話の少女はあたしなんだ。」

「えっ？そうなのか？」

杏子が言った真実に剣舞は軽く驚いた。

「あたしの事を悪いって言う奴が居たら本当にぶつとばしてくれるのか？」

「ああ、当然だぜ！」

剣舞がはつきりとそう言うのと杏子は明るく笑った。

「それよりも杏子。つらい事を話させてごめんな。」

「別にいいよ…剣舞に話したらなんか色々と楽になったから。」

「そっか…それならよかったぜ！」

剣舞は自分に杏子が話す事で楽になったと聞くと嬉しそうな顔をした。
友だちの役に立てて嬉しいのだろう。

「ふぁ…何か眠たくなってきた…」

剣舞は眠気に襲われると地面に寝転がった。

「杏子…一泊させてもらっぜ…。」

剣舞はそう言つと目を閉じてグッスリと睡眠に入った。

「寝るの早いな…あたしも寝るか…。」

杏子は剣舞の横に寄り添ってぎゅっと剣舞に抱きつき眠りについた。

今日の事で杏子は剣舞をより意識する様になつただろう。

剣舞の横で寝る杏子はとても安らかな笑顔をしていた…。

人のために願う事は悪い事じゃない（後書き）

ナ???「作者！中途半端に俺の名前を出すなよ。」

作者「何となく出したくて…。」

ナ???「何となくとか言う言葉を聞くとあの超絶な姫を思い出すぜ…。」

作者「でも、あの人は他の次元に行つたから、ナ???さん。もう会う機会はないかもですよ?」

ナ???「そりゃあどうかな…てかよ、後書きを男、二人で語るのって何か悲しくねえか?」

作者「次からは剣舞と女の子に任せるか…。」

ナ???「そうしろよ。でも、パキューンとかズキューンな展開にすんなよ。」

作者「しませんよ…。読者の皆様！次回からは後書きは剣舞とヒロイン達がつとめますのでよろしくお願いします!」

ナ???「パキューンとかズキューンな展開にはならないからそこは期待しないでくれよ。もしかしたらパキューンとかズキューンに近い事はなるかもしれないけどな。」

異変（前書き）

ナツ？「終盤じゃねえのに俺、出てんじゃねえか。」

作者「終盤に出るかもと言っただけで終盤にしか出さないとは言っていないので。」

ナツ？「そういう言い回しはありなのか？」

作者「あり……だと思っ……。」

ナツ？「……………」

異変

現在、剣舞は教会に泊まらせてくれたお礼に魔女退治を手伝っていた。

「礼なんていいのによ…。」

「そう言うなって、俺がしたいって言ったからやってるだけ何だしさ。」

杏子は剣舞は本当にお人好しだなと思ったがそれが剣舞の良い所かとも思った。

「おっ？あそこ空間の感じが変わってる。」

「結界か…でも不安定だ。これは魔女じゃなくて使い魔か。」

「魔女じゃなくても人に危害を加えるのは間違いねえだろ？早速倒そうぜ。」

「そうだな。」

前までの杏子なら使い魔に人を数人食わせてからグリーンフィードを孕ませてから狩ると言う筈だが剣舞と関わった事で杏子は少し変わったようだ。

「何かシヨボーイのが居たな。」

「使い魔だからシヨボーイのは当たり前さ。これぐらいちょちよいと終わらせる！」

杏子は使い魔を槍で軽く倒した。

「俺の出る幕は無かったなあ…。」

「あたしは強いからね。」

杏子がそう言って剣舞に向かってピースをしていると杏子の後ろに倒した筈の使い魔が現れた。

「危ねえ！杏子！」

「えっ？」

剣舞は即座に倒した筈の使い魔を蹴り飛ばした。使い魔は勢いよく飛んでいく。

「あれって、あたしが倒した使い魔じゃ…。」

「使い魔とも魔女とも違う感じだ…アイツ。」

「それってどう言う」

杏子が剣舞にそれがどう言う事か聞こうとした時、使い魔だった者が大悪魔の様な姿になり剣舞に超スピード襲いかかった。

「剣舞！！！」

杏子は大悪魔が剣舞に襲いかかった事で不安な気持ちになるが…

「大丈夫だぜ？これぐらいな。」

剣舞は大悪魔の頭を掴み平然と立っていた。

「力の感じがやっぱり異質だな…そんな事よりぶつとばすか！」

剣舞は拳に気を軽く溜めると大悪魔を殴りとばした。

「グオオオオ!!」

大悪魔は叫びを上げると弾けとんだ。すると倒された大悪魔はグリーンフシード…の様な物を落とした。

「あれはグリーンフシード?」

「グリーンフシードって言うのかあれ?」

「魔女の卵だよ。」

「魔女の卵…ねえ。」

剣舞は前に魔女を倒した時に落とした物とは、あれは別物だと思った。感じる力が違うから…。

「とりあえず回収しないとな。」

「待ってくれ!杏子。」

剣舞はグリーンフシードの様な物を回収しようとした杏子を呼び止める前に拾ったグリーンフシードを取り出し杏子に渡した。

「剣舞、グリーンフシードを持ってたのか!?」

「前にちよつとな…。なあ、杏子。それやるからあのグリーンフシードを拾うのは止めた方がいい。」

「何で?」

「あのグリーンフシードは何か変な感じがするからだ…。」

剣舞が真剣な顔をしてそう言うとき杏子は拾わないと頷くしかなかった。

「あれはとりあえず俺が持つとくよ。」

「変な感じがして危ないんじゃないのか…?」

杏子は剣舞が危険かもしれない物を持つと聞くと心配した。

「大丈夫！俺はこういう事は慣れっこだからな！」

しかし剣舞が笑顔でそう言うのと杏子は落ち着いた。

剣舞なら本当に大丈夫そうだから。

（これが何なのか調べてえんだけどな…チャタインが居れば…。）

剣舞はこれが何なのかチャタインに調べてもらいたかったがチャタインは自分の世界に居るので悩んでいた。

（まっ、どうにかなっか。）

しかしどうにかなるかとおっさり片付けてしまった。

「なあ…剣舞。マミから家追い出されてんだよな。」

「そういやそうだった（一日たったし許してくれてるよな？）」

「よかつたら、あたしと一緒にこれからは教会に住まないか？」

杏子は顔を赤らめながらそう剣舞に言う。

「いや、悪いな。マミが心配してるだろうから帰らないと。」

だが剣舞にそう言って断られた。すると杏子是不機嫌な顔をした。

「あたしよりマミが大事なのかよ…。」

「いや、そう言う事じゃ…」

「剣舞と一緒に住んでくれないならまた悪い事しながら楽に生きる

かな。正直、木の実とかの生活はきついし。」

杏子は剣舞に万引きを注意されて以来は盗みなどは働かずに暮らしていた様だが剣舞と一緒に住まないならまた悪い事をするかと脅し気味に剣舞に言った。

「悪い事はしちや駄目だろ。」

「じゃあ一緒に済めよ。」

「でも、マミが心配してるしな……。」

「やっぱり、マミの方が大事なんだ……。」

「杏子もマミと同じぐらい大切な友だちだ!」

剣舞は堂々とそう言った。杏子は友だちか……と少し暗い顔をした。友だちより上になりたいのだろう。

剣舞はどうすればいいんだと真剣に悩みまくっていた。

剣舞が人生で頭を一番使ったのは今日が恐らく初めてだろう。

あまりにも悩む剣舞を見ていたら杏子は助け舟を出した。

「じゃあこうしたらどうだ?」

「へっ?」

マミは現在、めちゃくちゃ暗くなっていた。

その理由は剣舞が外に居なかったからである。

「一日外で寝なさいとは言ったけど……何処かに行きなさいとは言っていないのに……はあ……。」

マミが溜め息をつくといんターホンが鳴った。

「剣舞が帰って来たのね！」

マミは玄関に急ぎ足で向かった。

そして玄関を開けるとマミは喜んだ顔になったがすぐにそれは崩れた。

「杏子…何で貴女も居るの？」

「これから、あたしもここに住むから。」

杏子がそう言うときマミはぽかーんとなった後、剣舞に詰め寄った。

「剣舞！これは一体どう言う事！！」

「いや、杏子が俺と一緒に居ねえと悪い事をするって言うからさ…。」

「本当は二人きりが良かったんだけど、あたしが妥協してマミの所で三人でもいいって言ったのさ。」

マミはガクツと床に膝をついた。

「マミ、どつか悪いのか！？」

「剣舞と二人きりの生活が…。」

マミの落ち込みを見てある事に気づいた杏子はマミの耳元でこう言った。

「剣舞は渡さないよ。」

「ッ！…杏子、貴女も…？」

マミは杏子の言葉で杏子も剣舞に好意を寄せてる事を知ると杏子を睨み付ける。

そんな二人を見ていて剣舞は…

「二人とも仲が良いなー。」

などとのんきに呟いていた。自分の激しい取り合いが行われてるとも知らずに…。

その頃…剣舞の世界では…

「チャタイン。何で俺に頼むんだ？」

「いや、他の人達が忙しくて出払っててね。」

「それなら仕方ねえか。チャタイン。たこ焼き屋の屋台ごとちゃんと転送できるんだろうな？」

「それはもちろん…というか屋台、本当に持って行くのかい？」

「俺の魂だからな！」

「別にいいけどさ…ちゃんと剣舞を迎いに行ってくれよ？」

「分かってるって。」

おっさんはそう言つと『708のたこ焼き屋さん』と書かれた屋台
を持って転送装置に乗り、剣舞のいる世界へと向かうのだった。

このおっさんは一体何者なのだろうか…？

異変（後書き）

剣舞「今回の後書きは俺とマミと杏子が任されたぜ！」

マミ「何を話せばいいのかしら…」

杏子「適当に何か言えればいいんじゃないの？」

マミ「適當って…。」

剣舞「質問があるからそれに答えようぜ。」

マミ「質問って読者から来てたかしら…？」

剣舞「これは俺の世界の人からの質問だけど？」

杏子「そんなんでいいのか？」

剣舞「読者から来ないしいんじゃないか？えっとまずは…ペンネーム『天才科学者』からの質問だ。『君達は剣舞とパキューンな事をしたいと思っただかい？』…パキューンって何？」

杏子「何を聞いてくんだこいつは…！」

ビリビリ！

剣舞「質問のお手紙を破んなよ…。」

マミ「剣舞とパキューンって…。」

マミは天才科学者の質問に顔を真っ赤にする。

剣舞「次はペンネーム『mother』からの質問だ。『剣舞！や

つかいな菌をばらまいて不祥事を起こしたらお仕置きだからな…！』

。これ質問じゃねえ！？てか、母さんじゃねえか！」

杏子「まともな質問がねーな。」

マミ「確かにね…。」

剣舞「次が最後だな。ペンネーム『完璧な人』からの質問だ！」

杏子「ペンネームがむかつくな。」

マミ「確かに自分を自分で完璧って言うのわね…。」

剣舞「えーと、『ペンネームの件だが済まなかったね。俺がペンネームを考えていると横から仲間に俺のペンネームはこれしかないと言われてしまったね。書き直そうとも思ったが仲間が好意で書いてくれたものだし書き直さなかったんだ。俺が書き直さなかったばかりに大変不快な気分になしてしまっただろうから謝罪をするよ。』」

杏子「むかつくとか言ってますみませんでした…。」

マミ「凄く丁寧な人だったわね…。私も謝るわ。」

剣舞「で、質問は『剣舞。君の回りに居る女性が顔を赤らめていたら気持ちに気付いてあげなきゃ駄目だよ?』…質問じゃないじゃん!?!」

杏子「でも正しい事は言ってるな。」

マミ「全くね。」

二人は完璧な人の言った事に同意していた。
しかし剣舞は…

「顔を赤らめてたらって…ただの風邪じゃねえのか?」

ブチッ

杏子「剣舞…鈍感にも程があるだろうが!」

マミ「ちよつと痛い目に会わないとね?」

剣舞「えっ?二人とも何でそんなに怒ってるの?」

杏子・マミ「一回痛い目に会え!!!」

剣舞「ええー!!!?」

簡単に諦めるな（前書き）

ナツ？「俺様の名前が明らかになるぜえ！」

簡単に諦めるな

「マミさん。剣舞さんにお話があるんですけど。」
「えっ？」

「と言うわけで美樹さんを連れてきたの。」
「何だ、さやか？俺に話して？」

剣舞に話があると言う事でマミの家に来たさやかは剣舞に真剣な顔をしながら話した。

「剣舞さんって不思議な力を使えますよね？」
「まあ、いくつかは使えるぜ。」

「剣舞さんは癒しの力って使えますか？」
「そいつは無理だ。」

剣舞にそうきっぱり言われるとさやかは落ち込んだ。

「無理…ですか…。」
「俺の仲間なら使える奴が居んだけどな！。」

剣舞は申し訳なさそうにそう言った。

「剣舞さんはその仲間を連れてくる事はできないんですか？」
「俺は事故でこの世界に来たから連絡手段と次元を移動する手段を持ってないんだよ。悪いけど無理だ。」

さやかはその言葉を聞くと更に落ち込んだ。
希望を失った人の様に…。

「何でアンタはそんなに癒しの力を必要とするんだ？」

「マミさん。この子は誰？」

「知り合いの魔法少女。佐倉杏子よ。ちょっとわけあって一緒に住んでるの。」

「それよりも何でアンタは癒しの力を必要としてるんだって聞いているだろ？」

さやかは杏子にそう聞かれると暗い顔をしながら答えた。

「恭介の為だよ…。恭介の腕は今の医学じゃ治らないって言われたから…。」

「何とかしてやりてえけどな…俺は基本戦うしか能がねえからな…。」

「そもそも人頼みにすんのが間違っただけだね。」

杏子がそう言うときやかは杏子を睨み付けた。

「誰かを頼って悪いって言うの！」

「誰かを頼るのが悪いんじゃないって誰かに全てを押し付けるのがいけないって言うてんだよ！」

杏子とさやかが喧嘩になりそうだったので剣舞は二人を止める。

「二人とも喧嘩すんなって。」

「ちっ、剣舞が言うなら仕方ねーか。」

「ふん！」

一応喧嘩にはならなかったが二人の仲は険悪な状態になっていた。

「しかしその恭介ってのは医者から治らねえって言われたらすぐに諦めたんか？」

「だって医者が言うなら望みはないじゃないですか…。」

「本当に恭介ってのが手を動かしたいなら医者に言われても無理じゃない。」

さやかは剣舞に突っ掛かった。

「何でそんな事が言えるんですか！」

「本当に手を動かしたいって奴が誰かに言われたら諦めんのか…ふざけんな！！」

滅多に怒らない剣舞が激しい怒りを見せた。

「世の中には手を動かせないよりももっと酷い目に会ってる奴も居るんだ！そしてそいつらは医者に言われたら全員が諦めてんのか！違うだろ！医者に言われても諦めずに現状を変えようと必至にもがいてる奴も居んだろ！簡単に諦めるってのはそいつらに対する侮辱じゃねえか！！」

剣舞の言った事は間違っではないだろう。

世界には医者にもう駄目だとか言われても必至にもがいてる者は居る。

そして彼らは医者の言った言葉を覆す事もあるのだから…。

「済まねえな…いきなり怒鳴ってよ…さやかが悪いわけじゃないのにな…。」

「いや、いいんです…確かに剣舞さんの言う通りです。私、恭介に頑張ってみるように言ってみます。」

「そっか…こつちも仲間と連絡とれたらどうにかしてくれるように頼んでみっからな。」

「ありがとうございます…。それじゃ…失礼します。」

さやかはマミの家から出ていき恭介の居る病院へと向かって行った。さやかが出ていった後、剣舞は少し暗い顔をしていた。

「俺、さやかに言い過ぎたかな…？」

「剣舞は正しい事を言ったと思う。それに剣舞は最終的にはどうにかするって約束したじゃねーか。気にすんなよ。」

「ありがとな…杏子。」

「れっ、礼を言われる事は言っただけよ！」

杏子は剣舞に礼を言われると頬を赤らめて照れていた。

「美味いぜ！俺のたこ焼きは！一パック200円！タコもデカイ！ぜひ買ってくれ！！」

外から突然響き渡る声がした。

そしてその声を聞いた瞬間、剣舞は驚いていた。

「この声は…！？」

「外でたこ焼き、売ってるみたいだね！マミ、おこね。」

「奢らないわよ。居候なのに図々しいわ。」

杏子はマミの耳元である事を呟く。

「剣舞に“あーん”ができるぞ。」

「買いましょうか！たこ焼き！」

マミはすぐにコロツと態度を変え、たこ焼きを買い気になった。

マミ達は家を出てたこ焼きを買いに行く。

たこ焼き屋の屋台は家の外のすぐ近くにあった。

「いい香…。すみません。たこ焼きを三パック、ください。」

「あいよ…お代はその兄ちゃんとの会話ね。」

たこ焼き屋のおっさんはマミ達にたこ焼きを渡すと剣舞を掴まえて屋台ごとどこかに飛んで行った。

「「剣舞！！？」」

二人は剣舞が連れ去られるのを見て驚くしかなかった。

剣舞は連れ去られ…山奥に来ていた。

「ナツパのおっさん…強引すぎねえか？」

剣舞を連れ去ったのはサイヤ人のナツパ。

彼は色んな経緯を経て剣舞の世界に住み着いた人物だ。

「俺達の会話を聞かれるのはあまりよくないだろうが。俺達は本来、奴らが関わる世界以外は関わるのはよくねえ事なんだぞ？」

「チャタインに聞かされてるから何となく分かってるけどさ…別に

いいじゃねえか。」

「お前が親父さんと違うのは軽い所だよな…まったく。それよりも剣舞、帰るぞ。」

「えっ！？そんな急に言われても困る！俺、約束した事があるんだよ！」

剣舞は焰との約束があるのでまだ帰るわけにはいけないそうナツパに言うが。

「ダメだ！この世界は見たところ奴らは関わっちゃいねえんだ。この世界の出来事はこの世界の住人に任せろ。妙に関わると歪みが起きるからな。」

「それは故意に世界に来た時だけだろ！俺は事故で来たんじゃないか！だから関わってもいいだろ！」

「わががま言うな！お前のパワーはハッキリ言ってこの世界には大きすぎるんだよ！」

言い合いは終わらないかと思われたが、剣舞がある物の事を思い出し、ナツパに見せる事で言い合いは終わりを迎える。

「ナツパのおっさん。これ見てくれ。」

「何だこりゃあ？…これ本当にこの世界の物か？…何故だかは分からねえがヤバイ感じがしやがる…。」

剣舞が見せたのはグリーンフィードの様なものだ。ナツパはそれを見て思わず冷や汗を流していた。それが放つ異様な雰囲気を感じて…。

「チャタインにそれ調べてもらってくれねえか？」

「チャタイン…どうするよ？」

ナツパは通信機を取り出しチャタインにこれをどうするかを聞いた。

『もちろん、調べるよ。では、ナツパ。剣舞を残し帰還してくれ。』

「剣舞の奴は連れて帰らなくていいのか？」

『もしもの事もあるかもしれないからね。』

「確かに俺もこれを見ていたらこの世界には手に終えねえ事が起きるかもしれないと思ったからな。ナイス判断だと思うぜ。チャタイン。」

「あつ！チャタイン。ちよつといいか？」

『何かな？剣舞。』

「回復魔法とか使える人を連れてきてもらえねえかな？」

『それは一体どうしてだい？』

剣舞はさやかとの会話の事をチャタインに全て話した。

『……………分かったよ。』

「それじゃあ！」

『正し…その恭介と言う人物が諦めずにリハビリを三ヶ月頑張ったからね。』

「やっぱりすぐにはダメだよな…。」

『当然さ。努力をせずにただ諦めてる奴なんかに手を差し伸べる価値はないからね。』

「……………」

『剣舞。分かっていると思うけど、恭介と言う人物に頑張ればどうにかなるとか言うのはNGだよ？』

「（ギクッ）分かっているよ…。」

「そう…恭介とか言う人物自身に言うのはね。」

剣舞はそれはつまり、さやかになら言ってもいいと言う事と理解し

た。

「分かった。恭介には言わねえよ。恭介にはな。」

『分かればいいんだよ。』

「いいのかよ？チャタイン。」

『あまり、負の感情をばらまかれるのもあれだしね。』

「確かにそりゃ、一理あるぜ。…じゃあな、剣舞。菌をあまりばらまくなよ、母ちゃんにしばかれたくなかったらな。」

ナツパはそう言うつと転送装置の力で元の世界へと帰って行った。

「菌をばらまくって何の事だ？」

剣舞はナツパに言われた事を理解できずにいた。

ナツパと別れたあと剣舞はさやかのを探していた。
チャタインとの会話の事を伝えるために。

「おっ、見つけた！おーい！さやかー！」

「剣舞さん！？」

空から急に剣舞が来たのでさやかは少しビックリしたがすぐに落ち着いた。

「さやかにいい話があるんだ！」

「いい話？」

剣舞はチャタインとの会話の事をさやかに話した。

「三ヶ月頑張れば恭介は治るんですね…よかった。」

「恭介に伝える時は遠回しに伝えてくれ。直接的な形で言った場合はチャタインが納得しねえからな。」

「はい、分かりました！私、恭介の所にもう一回、行ってきます！」

さやかは嬉しそうな表情をして走りながら恭介の元へと向かった。

病院の恭介が居る部屋にさやかは現在来ていた。
ある事を伝えるために。

「恭介！頑張つてリハビリすれば絶対治るよ！」

「さやか…さっきも言ったけど頑張れば絶対に治るわけじゃないんだ！今の医学で無理と言われたんだぞ！それともさやかは僕が必至にもがく姿を見て楽しみたいのかい！」

「私はそんなつもりじゃ…本当に治るんだよ！三ヶ月頑張れば！」

「三ヶ月頑張れば治る？その保証は何処にあるんだい？」

恭介は苛立ちを秘めた目でさやかを見ながら言葉を発した。

さやかはそんな目で見られて萎縮するも、必至に恭介に訴えかけた。

「理由は言えないけど治るんだよ！」

「何だよそれ…それじゃ、わけが分からないだろ…！」

恭介は苛立ちを自分の自由に動かない腕を叩きつける事で表現した。
さやかは恭介が腕を叩きつけるのを見ると悲痛の表情をする。

「やめてよ！恭介！」

「うるさい！奇跡や魔法でもなければこの腕は治らないんだ！」

さやかは奇跡や魔法と聞くとある生物を思い出した。そう…キユウベえの事を。

「恭介…あるよ…奇跡も魔法もあるんだよ。」

さやかはキユウベえと契約し願いを叶える事を決めた。

恭介の腕を治すと言う願いを…。

（剣舞さん…好意を踏みにじってごめんなさい…。…でも、こんな恭介は見られないから…。）

この日、美樹さやかは願いを叶えると同時に呪いをその身に背負う事になるのだった…。

簡単に諦めるな（後書き）

作者「恭介エ……」

ナツパ「ナツパスラッシャーにかけてえ……アイツ。」

作者「頑張れよ！イナズマイレブンGOの剣城の兄ちゃんみたいに！」

ナツパ「確かにあつちは弟が頑張ってたら、リハビリを必至にやつてたもんな。」

作者「ちきしょお……恭介が頑張るイメージがないから、さやかが……」

ナツパ「剣舞がどうにかすんだろ。」

作者「………そつすね。」

ナツパ「でもやつぱり、アイツはナツパブレイクラッシュユハリケーンにかけてえなあ……。」

作者「技変わってますよ。」

ナツパ「ナツパスラッシャーの上位技だ。」

作者「そう何ですか。………ではまた次回……。」

ナツパ「剣舞……ちゃんとどうにかしやがれよ……。」

マミと杏子と遊園地デート（前書き）

ナツパ「女の子、二人とデートかよ。剣舞の奴はマジで母親にボコられんな。」

マミと杏子と遊園地デート

「ひっ、ひったくりだー!!」

「へっへっへっ。」

相手から物を奪ってにやけてるひったくり犯。

すぐににやけ面は崩れるが。外を軽く走っていた剣舞のパンチで。

「よっど。」

「あべし!？」

「ほら、盗られた荷物だぜ。」

剣舞はひったくりにあつた人に盗られた荷物を渡す。

するとその人は荷物からいそいそと何かを取り出し剣舞に渡した。

「これ、お礼です。」

「別に礼なんかいらねえよ。礼がほしくてやったわけじゃねえんだぞ。」

「いや、私にはもう必要がなくなったものですから……。」

その人はそう言う少し走りながらこの場を去った。

「遊園地のチケットか…マミと杏子を誘うか!」

「マミ!杏子!遊園地行こうぜ!」

「何だよいきなり？」

「遊園地のチケットはどうしたの？」

「それはだな……。」

剣舞は事の経緯を話した。

「人助けのお礼か……剣舞らしい手に入れ方ね。」

「それよりも二人とも行くか？」

「行く！」

こうして剣舞達は遊園地でデートする事になった。

剣舞はデートなどと思ってないだろうが……。

「まずは何処に行けばいいかな？」

「王道はジェットコースターよね。」

「お化け屋敷もじゃないか？」

マミと杏子はそれぞれ遊園地でメインになってそうな所を言った。

剣舞は二人の言葉を聞くとこう答えを出した。

「じゃあ、楽しみは後にとつといて他の所から行こうぜ。」

「剣舞がそう言うならそうしましょう。」

「正直、剣舞と一緒になら何処でもいいしな。」

二人は剣舞の意見に賛成する事にした。

剣舞達はとりあえずコーヒカップに向かった。

「くるくる回す奴だな。」

「二人乗りか…。」

「杏子…。」

マミと杏子はお互いに睨み合つと拳を握り締め…じゃんけんをした。結果は杏子の勝ちである。

「よっしゃ！」

「そんな…。」

マミはかなり絶望的な顔をしていたが、杏子はそれを無視して剣舞を連れコーヒカップに乗った。

「マミはコーヒカップに乗らねえのかな？」

「マミの事なんか気にすんなよ。」

結構酷い事を言う杏子だった。

杏子はコーヒカップをくるくると勢いよく回した。

「どうだ！剣舞！」

「全然平気だぜ！」

杏子はそれを聞くと更に回転を早める。

「ど、どうだあ…。」

「風を感じて気持ちいいな。」

杏子はあまりにも早く回しすぎたためにコーヒカップから降りたあと。

「おええ…。」

おう吐してしまった。マミはそんな杏子の姿を見て若干ほくそ笑んでいた。何か黒い…。

「だ、大丈夫か！杏子！」

剣舞は杏子の背中を優しく擦る。すると杏子は少し楽になった表情をした。

「な…何とかな…。」

杏子は剣舞に背中を優しく擦られた事でとりあえず復活を果たした。マミはあまり面白くない顔でそれを見ていた。

「マミ…何だよその顔は？」

「別に貴女が気分が悪くて動けなかったら剣舞と二人きりとか思っ
てないわ？」

「思いつきし思ってたんだろうが…。」

杏子はマミに突っかかるようにするが剣舞がそれを止める。

「喧嘩すんなよ、杏子。」

「だってコイツが…。」

「それに杏子が倒れたら遊んでおけるわけねえだろ。看病しないと
いけねえんだから。」

杏子は剣舞にそう言われると顔を真っ赤にしてうつむいた。

「……………剣舞、ありがとう。」
「何で礼を言ってたんだ？」

剣舞は自分の思った通りの事を言っただけなので何故礼を言われたか理解できなかった。

剣舞達は次にミラーハウスに向かった。
鏡が張り巡らされて混乱する奴である。

「どれだけ早く突破できっかな？」
「鏡のせいで混乱して中々先に進めないのよね……………」
「感で進めばいいんだよ。」

剣舞達はミラーハウスに入った。
中のミラーはやはり正確な道を分かりにくくしていた。

「分かりにくいわね……………」
「こういつときは鏡に手を当てながら進めばいいのさ。」

杏子が鏡に手を当てながら進めばいいと言つとマミは鏡に手を当て進む事にした。

「……………鏡だしちょっとだけなら……………」

マミは鏡に映っている剣舞の男の大事な所をさわってみた。
女の子でもこういう事をする時はあるのだろうか……………」

「……………マミ。何で俺のさわってたんだ？」

マミがさわったのは鏡に映ったものではなく本物だったようだ。
当然マミは顔を真っ赤にする。

「ち、違っのこれは！ちよつとよろけちゃって…。」
「そっか、体調が悪いならちゃんとええよ。マミ。」

剣舞はセクハラをされたのにマミを心配した。
本人がセクハラと気づいてないだけかもしれないが…。

「おい、マミ。今の絶対わざとさわったよな？どんな感じだった。」

杏子は剣舞のあれがどんな感じかをマミに聞いた。
二人はかなりあれな会話をしている。

「凄くおつきかった…。」
「どれくらい？」
「このくらい…。」

マミが手で剣舞のあれの大きさをジェスチャーすると杏子は目を見開いて驚いた。

「まだ、起ってないのにそんなにデカイのか！？」
「杏子…女の子が、起つとか言うのはちよつとあれよ…。」
「ガチでセクハラした奴にあれとか言われたかねーよ。」

マミは杏子にそう言われると何も言い返せなかった。
確かにセクハラをしているし。

「ミラーハウスを早く突破しようぜ！マミ！杏子！」

剣舞にそう言われるとマミと杏子は考えを切り替えてミラーハウスを突破する事にした。

「結構早く突破できたな。次は何処に行こうか？」

「お化け屋敷がいいんじゃないかい。」

「お化けか……」

マミはお化けと聞くと少しぶるっとしていた。

女の子はお化けとか結構苦手だから仕方ないだろう。

「じゃあ、お化け屋敷に行こうぜ！」

剣舞達はお化け屋敷に向かった。

杏子は別に恐怖の色を見せないがマミはかなり怯えてる。

「マミ。作り物だからそんなに怖くないって。」

「でも……。」

「びびりまくってんの！ マ三の奴。」

杏子はマミの怯え方を笑っていたが、すぐに笑えなくなった。

「ヴァアアア
ンンンンンガ
アアアア
トトトトトト。」

変な奇声を上げながらリアルなゾンビの作り物が現れたからである。

「ぎゃあああああ！！？」

「きやあああああ！！？」

マミを笑っていた杏子が真っ先に驚いて剣舞に抱きつき。マミも驚いて剣舞に抱きついた。

「おー、リアルだな。でも本物には及ばないぜ。」

「剣舞は本物に会った事があんのかよ…!？」

杏子は剣舞が本物のゾンビに会った事があると聞いて驚いた。
まあ、驚くのは普通だろう。

「そのゾンビは友だちだけだな!」

「剣舞の友だちの枠って凄い事になってそうね…。」

ゾンビまで友だちと言う剣舞の友だちの枠はどんなものになっているか気になるマミだった。

剣舞達は怯え（マミと杏子だけが）ながらもお化け屋敷を進む。

「妙にリアルじゃねーかよ、ここのお化け屋敷…嘗めてたわ…。」

「本当に力が入りすぎよ。ここのお化け屋敷は…。」

「二人とも何で俺に抱きついたままなんだ？」

剣舞はさっきからマミと杏子に何で抱きつかれてるか分からなかった。

「抱きついてないと、あたしは死ぬんだよ!」

「私も!」

「えっ!? そうなのか!？」

剣舞は抱きついてないと死ぬと言われ驚いていた。

しかし実際は抱きついてなくても死なない。

「お”れ”ば、プリ”ティ”オ”バゲエ”エ”エ”。」

何かを呟きながら顔が凄く気持ち悪く怖いお化けの作り物が出てきた。

「うげえ！！？気持ち悪りー！！？」

「たぶんプリティとか言ってるけど全然プリティじゃないわよ！！？」

「この形どっかで見たような…。」

マミと杏子はお化けの気持ち悪さに引き。剣舞はお化けの形を見て何かを思い出していた。

「心臓に悪いわ、ここは…さっさと出よう。」

「同感だわ…杏子…。」

「さっさと出るなら何で入ったんだ？」

怖いもの見たさと言う奴だろう。

後は好きな男性に抱きつきたかったり。

それから剣舞達は様々な怖い仕掛けにびびりながらもお化け屋敷の出口の近くまで来ていた。

「やっと出口ね…。」

「遠かったよ…。」

「意外とリアルな物が見れて楽しかったな！」

マミと杏子はやっと出口と安心しきっていたが…。

「ヴボアア…。」

「ギウアア…。」

「オンドリルパキプシラクリカラスヘアッププルシケナト…。」

ゾンビがぞろぞろと色々な所から現れて寄ってきた。

「こっ、怖ええ…。」

「こっ、来ないで…。」

マミと杏子は怯えて動けなくなっていた。

そんな二人を見た剣舞は二人を抱えた。

「ダッシュで行くぜ！」

剣舞は二人を抱え出口まで走って行き、お化け屋敷から出た。

お化け屋敷から出た剣舞達。マミと杏子は剣舞に抱えられてたので顔を真っ赤にしていた。

「次はジェットコースターにすんだよな。」

「う、うん…。」

「そ、そうね…。」

「二人とも何で顔を赤くしてんだ？」

ここはお前のせいだよとツツコムべきだろう。

ジェットコースターに向かった剣舞達。ジェットコースターは幸い席が三つあるタイプなので醜い争いは起きなかった。

「剣舞は真ん中ね。」

「何で真ん中？」

「いいから真ん中に座れ！」

剣舞は杏子に真ん中に強引に座らされた。
当然、マミと杏子は剣舞を挟む様に座った。

「剣舞…手え握んぞ…。」

「私も握るわよ…。」

「別にいいけど？」

剣舞はマミと杏子に手を握られる理由は二人は怖いから自分の手を握ってると思っている。

実際はそれだけではないのだが…。

「おっ、発車するみたいだな。」

ジェットコースターは最初はゆっくりと進むが…後から一気に加速する。

「ぎゃあああああ!!」

「きゃあああああ!!」

「二人とも怖がりすぎじゃねえか？」

マミと杏子はジェットコースターが止まるまで剣舞の手をギュッと握り締めていた。

「もう、特に行く所はねえかな？」

剣舞は楽しい所は大体行き着くしたなと考えていた。

マミと杏子は顔を赤らめながら剣舞にある事を聞いた。

「な、なあ…剣舞。今日、あたしに抱きつかれたりしてどう思った？」

「どうって？」

「私や杏子とふれ合ってドキドキしたりしたか聞いているの。」

「友だちだからふれ合うのは普通じゃねえか？」

マミと杏子はそれを聞くとガクツとした。

明らかに友だち以上のスキンシップをしていると言うのに剣舞の反応がこうだからだ。

「剣舞、最後に観覧車に乗ろっか？」

「あたしも賛成だ。」

「観覧車ってそこまで楽しくないと思うんだけど…？」

「「いいから！！」」

「は、はい！」

二人の威圧に従うしかない剣舞だった。

マミと杏子は観覧車にて強行手段に出る気だった。

鈍感な剣舞に自分達の思いを分からせるために。

「観覧車って風景を眺める以外、特にないよな。」

剣舞がそうポツリと呟く。

剣舞がボーッと外を眺めているとマミと杏子が近づいて来た。

「んっ？な…ムグっ！？」

剣舞は何かとマミ達の方を振り向くとマミにキスをされていた。
次に杏子からもキスをされた。

マミと杏子は目を潤ませながら剣舞を見た。

「これで好きって言っても友だちの好きじゃないって分かるよね？」

「あたし達は剣舞の事が好きだ…一人の女として。」

「！！？！！？！？」

剣舞はいきなりの展開について行けなかった。

混乱して頭がオーバーヒートしそうになっていた。

剣舞が混乱をしていると観覧車は一周して乗り場へとついた。

マミと杏子は自分達の行動が恥ずかしくなり走り去る様に観覧車から降りたが、剣舞はうつむきながら観覧車の中に居た。

「お客さま…降りないんですか？次に乗られる方が居るんですけど…？」

「すみません…もう一周お願いします…。」

剣舞が尋常じゃないぐらい悩んだ顔をして言うとスタッフも次のお客も何も言えなかった。

「二人の女の子に告白されたのか俺？うん、確かにされたよな…どうすりゃいいんだ…誰か答えを教えてくださいええええ！！！！」

剣舞はそう叫ぶが誰も答えを教えてくれる者は居なかった…。

マミと杏子と遊園地デート（後書き）

剣舞「誰か：誰か答えを教えてください。」

作者「自分で見つけるしかないと思う。」

ナツパ「とりあえず、お前は母親にボコられんのは決定だ。」

剣舞「俺はそもそもマミと杏子に好かれる事をしたっけ…？」

ナツパ「お前の親父さんも似たような事を言ってたな。答えは簡単、いつの間にかやってたって事だ。」

剣舞「　　」

作者「悩み過ぎて壊れたか。」

ナツパ「ほっときや治んだろ。」

作者「ではまた次回！」

剣舞「　　@」

ナツパ「まだ壊れてらあ…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9733z/>

魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア

2012年1月13日14時47分発行